

日系三世のアイデンティティとセクシュアリティ

—— 日系詩人デヴィッド・ムラの場合 ——

佐 藤 清 人

(英米文化論)

はじめに

日系アメリカ人三世であり、また詩人であるデヴィッド・ムラ (David Mura) は、詩集のみならず数冊のエッセイ集をも出版してきた。そうしたいくつかのエッセイ集のなかで、特に注目されるのは、1984年に留学生として約1年間日本に滞在したときの体験を記録した『ターニング・ジャパニーズ』(*Turning Japanese*) と、アメリカに帰国した後、自分自身と家族について著した『肉体が記憶と出逢う場所』(*Where the Body Meets Memory*) の2冊である。ムラはこれらの著作で、日系アメリカ人としてのアイデンティティ、白人社会における日系人のセクシュアリティと結婚、また、日系二世である両親との確執などといった話題に繰り返し言及している。アイデンティティや世代間のギャップというテーマは日系二世の著作にもしばしば見受けられる。たとえば、ヒサエ・ヤマモト (Hisaye Yamamoto) の短編やジョン・オカダ (John Okada) の『ノー・ノー・ボーイ』(*No-No Boy*) のなかにも、同様のテーマを見出すことができる。しかし、三世であるムラが抱えるそれらの問題は、明らかに二世のそれとは異質なものである。本稿ではまず、日系三世が抱えるアイデンティティと世代間のギャップの問題について、日系二世の場合と比較対照しながら、論じてみたい。

ところで、ムラがアイデンティティや世代間のギャップ以上に拘泥し続けている問題は、セクシュアリティの問題である。セクシュアリティの問題は、今まで日系人の口から語られることは稀であった。というよりも、それはタブーであったように思われる。もちろん、日系アメリカ人の著作のなかで、性や結婚の問題がまったく語られなかったわけではない。そうしたテーマは、とりわけ文学作品においては、必須のテーマといってよく、日系人作家も当然のように取り上げてきた。しかし、異人種間の性、とりわけ白人と日系人との間の人種を超えた性の問題は、ほとんど取り上げられることはなかった。だが、ムラは果敢にこうした問題に挑み、自らの性と結婚の問題について語っている。日系人同士で結婚することの多かった二世とは異なり、三世のなかには白人と結婚する者が多い。ムラ自身も白人であるスージー (Susie) を妻としている。異人種間の性と結婚というテーマは、三世及びそれ以降の

世代の日系人にとって、もはやタブーにしておくことのできないテーマである。いやむしろ、それは彼らの人生の中核をなすテーマといってよいであろう。ムラのセクシュアリティをめぐる思考と行動の軌跡をたどることが、本稿の二番目の目的である。

詩人であり、エッセイストであるムラの関心が文学、あるいは書くという行為に向かうのは必然である。日系アメリカ人の生の記録、日系アメリカ人の物語はいったいどのような意味を持つのか。日系アメリカ文学とは何か。こうしたテーマに、ムラは断片的ながら、たびたび言及している。日系アメリカ文学に対するムラの認識の仕方を探るとともに、彼自身の作品が日系アメリカ文学のなかでいかなる意義を持つのか。こうした問題を最後に取り上げてみたいと思う。

日本留学とアイデンティティ

デヴィッド・ムラは1952年アメリカ中西部イリノイ州シカゴに4人兄弟の長男として生まれている。彼の住んでいる町では、ユダヤ系の住人が4分の3を占め、ムラの一家はその町に住む数少ない日系人家族であった。彼の両親は決して日本の文化や習慣を引きずって暮らす人々ではなく、家庭生活はアメリカの一般中流家庭と何ら変わるものではなかった。しかし、家族の人々の顔に刻まれた日本人の特徴は変えようもなく、国籍のうえでは正真正銘のアメリカ人ではあったが、日系人であることを意識しないわけにはいかなかった。また、誰よりも周りに住んでいる人々が、彼らが日系人であることを知っていた。そしてそのために差別を受けたこともあった。

こうした環境のなかで、ムラ自身は、白人のアメリカ人と同じように生きようとした。彼にとって、日系人であることは恥辱であり、日本的なものは努めて避けた。60年代後半の青春時代には、アメリカの多くの若者たちと同じように髪の毛を長く伸ばし、マリファナを吸ったりもしている。大学では英文学を学び、70年代の欧米の文学や思想に親しんだ。生活様式のみならず、ものの考え方においても彼がアメリカ人になろうとした努力の結果である。だが、それでもなお彼の心は、定まらぬアイデンティティの不安に揺れ動かずにいなかった。

しかし、ひとつの転機が訪れたのは、1984年に日本へ留学したときであった。この年、奨学金による海外留学の機会を与えられたムラは、当初、留学先としてフランスのパリを考えていた。こうした選択は、70年代のフランスの思想・哲学に触れたアメリカ人青年の選択としては、至極当然であったといえよう。ところが、彼が最終的に留学の目的地として選んだのは日本の東京であった。それまで事あるごとに遠ざけ、忌み嫌ってきた日本。その日本をあえて留学先として選んだムラの心情は複雑である。先祖の生まれた国を見たいという

願望も少なからずあったであろうが、未だ解決の方向さえ見えないアイデンティティの不安を解消する手がかりが、もしかしたらこの日本にあるのかもしれないという閃きのようなものがあつたのかもしれない。

日本留学によってムラが確固たるアイデンティティを獲得したと断言することはできない。しかし、アメリカにいた頃に較べて、アイデンティティの不安から解放されたことに、疑いの余地はない。物価の高い東京で奨学金を頼りに暮らす生活は、決して経済的にゆとりのあるものではなかった。けれども、言葉はうまく通じなくても、自分と同じような顔をした人々に囲まれて過ごす毎日は、彼に精神的な安らぎを与えたのであつた。また、日本の文化との出会いは、彼に日本の文化に対する敬愛と共感をもたらした。三島由紀夫や円地文子の文学のなかに登場する抑制的な社会のなかで煩悶する主人公のなかに、ムラは自分自身の分身を発見した。さらに、留学中に通った大野一雄の舞踏は、古代から今日まで脈々と生き続ける日本の精神をムラに吹き込んだ。ムラの日本留学は、日本文化との交流と相まって、彼に計り知れぬほど多大な影響をもたらしたのであつた。彼はこう述懐している。

Japan allowed me to see myself, America, and the world from a perspective that was not white American. (TN, 368)¹

アメリカにおいて、ムラは常に白人の目からものを見ることを強いられてきた。また、彼自身それを当然のことと見なし、それ以外の視点、それ以外のものの見方があることを知らなかった。白人以外の新たな視点の発見は、自分自身の発見でもあつた。日本留学から帰国した後、彼は西洋の文化に対する関心が翳ってきたことを告白している。日本留学によって日本文化に対する新たな目を開かれたムラは、アメリカにおける白人の文化よりも自分たち日系あるいはアジア系のアメリカ文化に関心を寄せるようになったのであつた。

世代間のギャップ

日系アメリカ人の一世と二世の間には世代間のギャップが大きく、それはしばしば日系アメリカ人作家によって書かれた文学作品の主要なテーマのひとつとなってきた。日本から移民した一世の人々は、日本の文化や習慣をそっくりそのままアメリカに持ち込んで生活し、英語を使用することもままならなかった。一方、アメリカの風土のなかで生まれ育った二世の人々は、英語を日常的に使用し、日本語は片言しか話せなかった。こうした一世と二世の間では、価値観も異なり、意思の疎通もうまくいかず、両者の間に激しい衝突が生まれることも稀ではなかった。しかし、こうした世代間のギャップは一世と二世の間にのみ存在した

わけではなかった。二世と三世の間にも、形こそ異なれ、同じような溝があったのである。ムラが語る父と息子の確執は、二世と三世の間に生じたギャップの典型であるかもしれない。

父との間で生じたあるエピソードについて、ムラは繰り返し言及している。それは彼の青春時代に起こった出来事である。ムラは彼が青春時代を過ごした1960年代の若者と同様に髪を長く伸ばしていた。それは、彼自身述べているように、彼がアメリカ社会に同化していることの証しだった。ところが、息子同様アメリカで生まれ育ったにもかかわらず、保守的で旧弊な彼の父は、そうした男性の長髪が気に入らず、ムラに髪を切るよう命じたのである。いやそればかりか、父は息子を椅子に座らせて、自らの手で息子の髪を切り落としてしまったのである。この事件はムラにとってよほど腹に据えかねたものらしく、彼は憤慨しつつ再三にわたってこの事件に言い及んでいる。

ところで、こうしたムラの髪をめぐる事件は、表面的には、決して日系アメリカ人の父子に特有な対立や不和ではない。世代を異にすれば、おのずと価値観も異なる。このような父と子の対立は、世界中にいる数多の父と子との間に、少なからず見られるものであろう。しかし、ムラと父との間には、じつは、日系アメリカ人ゆえにこそ存在するもうひとつの反目関係が存在していた。

ムラの両親は、他の多くの二世と同じように、第二次大戦中収容所生活を送っている。そしてこれもまた他の二世と同じように、彼らは収容所での体験について多くを語ろうとはしない。たとえ自分の子供に対してでも、彼らは口を噤んだままである。ムラは収容所生活を完全に封印し、おそらくはそのときに感じたであろうアメリカに対する憤りや怒りを示すこともせず、またアメリカの不当性に抗議することもしない両親、とりわけ父に対して不甲斐なさ、やるせなさを感じていた。

1990年にムラが教鞭を執っている大学に偶然ゴードン・ヒラバヤシ (Gordon Hirabayashi) がやって来た。ヒラバヤシは、第二次大戦中に日系人の強制収容を行ったアメリカ政府に対して、その不当性を法廷に訴えた勇気ある日系人のひとりである。ムラはヒラバヤシから収容所時代の話をも直接聞く機会を得たのだが、ヒラバヤシとの会見後、彼はこんな感想を漏らしている。

If Gordon Hirabayashi had been my father, if my father talked like this, I would have felt differently about my body, about my sexuality. . . .

Of course, had Hirabayashi been my father I would know more about the camps and its history, and I would have grown up with different political beliefs. But what I felt listening to him in that moment wasn't intellectual. There was something in his energy, his anger, his freedom, that went beyond intellectual

awareness or knowledge. I felt something physical in his presence, something palpable about the way he was in his body, the way his words allowed me to be in my body. (*Body*, 246)²

ヒラバヤシのなかに感じられた肉体的な力強さを、ムラは彼の父のなかに見出すことはできなかった。彼の父はいわゆるモデル・マイノリティの典型であり、アメリカ社会のなかに同化し、決して目立ったことをせず、控え目に生きることを身上とするような人物であった。モデル・マイノリティという言葉は、アジア系アメリカ人に向けられた賞賛の言葉だが、それは白人の価値観に基づいて発せられた言葉にすぎない。日系人自身の立場からすれば、それはむしろ蔑称であろう。アイデンティティに悩むムラにとってモデル・マイノリティに甘んじる父は、あまりにも頼りがいのない存在であった。

一方、ムラの母親はどうであっただろうか。後述するように、ムラは青春時代にポルノグラフィやドラッグにのめり込み、また、学生時代から交際し、やがて結婚するにいたったスージーという白人の妻がいながら、その間、他の女性との情事に耽ったりして、精神的に不安定な生活を送ってきた。それゆえ、しばしば精神の安定を求めるためにセラピストのもとに通い、カウンセリングを受けていた。ムラが大学院を修了するころ、妻のスージーと両親も交えてカウンセリングが行われることになったときのことである。そのカウンセリングで、前述したデヴィッドの髪の毛をめぐる事件が話題に上ったが、父はそのときの様子をあまりよく覚えていないようであった。一方、母はすべてを知っていたにもかかわらず、何も声に出しては言えなかった。すると、セラピストのひとりからムラは彼が母親の愛情を必要としていたことを告白するよう促される。はじめはためらっていたムラだったが、ついに彼の感情が堰を切ったように飛び出した。

Finally, I blurted out, in words to this day I can hardly believe I pronounced, “I need you, I love you, I need you so much,” and burst into tears.

My mother sat there stunned. And then, to my surprise, she rose, stepped forward, and hugged me. It was not a typical gesture. I was rippling with sobs. I felt embarrassed at my need, naked. (*Body*, 228)

日本人的な気質がムラ一家に流れていたためであろうか、家族の間では、お互いの感情を露わにすることを控えてきたのであった。この点については、必ずしも母に非があるとは言いきれない。ムラ自身もセラピストに促されるまでは自分の感情や思いを母に示すことを避けて来たのだから。親子の意思と感情の疎通を阻んできたものは、まさに彼らの身体に受け継

がれてきた日本人の気質のためであったかもしれない。

セクシュアリティ

ムラは、自分のセクシュアリティについて、じつにあからさまに述べている。精神的な恋愛ならともかく、肉体的な性と愛の問題について、ムラほど率直に語った日系アメリカ人はいないであろう。モデル・マイノリティであるアジア系アメリカ人は、性についても行儀良く、控え目であることが当然とされてきたのである。むしろ、近年にいたってアジア系アメリカ人の著作のなかにも、同性愛や倒錯した恋愛をテーマとする作品が多数書かれるようになり、性に関する禁忌は解かれたように見えるが、それはごく最近のことではない。³ しかも、日系アメリカ文学に限定すれば、そうした例は極めて少ない。ムラの著作は、日系アメリカ人の性のテーマについて新たな地平を開いた作品といつてよいであろう。

現在、ムラはスージーという白人を妻に持ち、彼女との間には三人の子供がいる。外見的には、幸せな家庭を築いているように見える。にもかかわらず、ムラは何故自分の性の遍歴を告白するのであろうか。それは彼の家庭や家族の幸福をおち壊しかねないはずなのだが。

ユダヤ系白人社会を中心とする環境で育ったムラが、白人の女の子や女性に惹かれていくのは当然のことであった。一方、日系人である自分が白人女性にとって魅力的な性の対象とはなりえないことも、経験的に自明であった。少年の頃、白人の友人たちとゲームをしていたとき、密かに彼が憧れていた少女は、ゲームの規則で彼女がムラにキスをしなくてはならなくなったとき、キスをすることを拒んだのであった。こうした状況のなかで、ムラは日系人である自分が白人に対して人種的に劣っているというコンプレックスを植えつけられることになった。そうした彼のコンプレックスと白人女性に対する欲望は、性の目覚めとなるべき出来事によってさらに一層助長される。

十代のなかば、ムラは父が隠し持っていた男性雑誌『プレイボーイ』を偶然発見し、その紙面に載っていた女性のヌード写真を見て性的興奮に駆られる。以来、彼は人目を忍んではその雑誌に見入り、自慰行為に耽るのであった。こうした青春期における性の目覚めは決して特異なものではなく、ごくありふれたものである。しかし、ムラ自ら告白するように、彼の欲望の激しさは通常の青年のそれをはるかに超えるものであり、彼はすっかりポルノグラフィにのめりこんでしまった。

しかし、大学に入学後、彼は思いの外白人女性に好かれている自分の姿を発見することになった。そして後に妻となるスージーと出会ったのもこの頃である。ムラはスージーという彼女にとっては願ってもない白人女性を恋人、さらには妻とするのだが、それと並行して、スージー以外の複数の女性と幾度となく交渉をもっている。しかも、こうした出来事を彼は詳

しく著書のなかに記述さえしているのである。自分の妻に対する裏切りともいうべき行為を公然と世間に知らしめる彼の行動に対して、彼の友人たちは驚きを禁じえない。たしかに久しく羨望の対象であった白人女性を恋人、後には妻としながら、他の白人女性たちとの付き合いを重ねていくムラの行為は、われわれ読者の目にも奇異に映る。いったい、ムラのこうした行動は、どのように理解されるべきなのか。

彼自身認めているように、たしかにムラは一般の若者よりも性的欲望が強かったのかもしれない。しかし、彼が複数の女性と交渉を重ねた理由はそれだけではないであろう。また、たんに彼が浮気性というのでもないであろう。ならば、何がその理由なのか。ムラはスージー個人の性格や行動に対してとりわけ不満を述べてはいない。彼に不満があるとすれば、白人女性と結婚したことによって満足し、有頂天になってしまっている日系人の自分を世間に晒してしまうことではあるまいか。まるで宝物をもらったかのように白人女性を与えられて、それで満足し切ってしまうことは、人種差別の容認であり、自らの敗北でしかない。それを十分に認識しているムラは、スージー自身には何ら問題がなくとも、他の女性との交渉を重ね、白人女性との結婚によって決して満足し切ることのないアジア人を演出しなければならないのだ。ムラの複数の女性との交渉は、彼の浮気な性格や倫理観の欠如ではなく、人種差別に抵抗しようとする果敢な行為と思われる。

ムラが愛する妻を犠牲にしながらも、複数の女性と交渉する行動には、さらにもうひとつの理由が見出される。たとえば、次のような記述を見てみよう。

A friend, the Japanese American actor Marc Hayashi, once said to me, “Every culture needs its *eunuchs*. And we’re it. Asian American men are the *eunuchs* of America.”

When he said this, I felt this instant shock of recognition. I knew I’d been fueled by a fury over this my whole life. It’s part of what led me into so much trouble. (*Body*, 17, イタリック体は筆者)

アメリカ社会においてアジア系アメリカ人は宦官であるという友人の言葉は、ムラにとってたてようのない衝撃であった。さらに彼は言う。

I was excited by what I thought would deny me, what was most forbidden. . . .

That was a sign that I was special. I was not like other Asian men.

I possessed a sexual power most of them lacked. . . .

What I was fighting against was the stereotype of the asexual Asian man, the

eunuch gook. I almost never saw an Asian man with a white woman, though I'd certainly seen examples of a white man with an Asian woman. (*Body*, 189)

去勢された男性のイメージは、アジア系アメリカ人のなかでもとりわけ日系アメリカ人男性に当てはまる。ムラは、強制収容所の体験が一世の父親たちを去勢し、その父親としての威厳や権威を剥ぎ取ってしまったと妻スージーが感想を述べたことを伝えているが(“She [Susie] felt the camps had emasculated the Issei Fathers, at least in the eyes of their sons.” (259)), 去勢されたのは必ずしも一世の父親だけではなく、二世も含めたすべての日系アメリカ人について言えることだろう。宦官、去勢された男性のイメージは、ムラにとって脅迫観念となっている。振り返ってみれば、父親によって髪の毛を切られた事件にムラが執拗にこだわったことも、彼の目には、それがまさしく父親によって自分が去勢されてしまう行為と映ったからに違いない。力強い男性性を示すことは、ムラにとって最重要課題となったのだ。

アメリカでは、アジア系アメリカ人は総体的に女性的な存在として見なされてきた。白人によって生み出されたアジア人の脆弱なイメージに抵抗し、それを粉碎しようと努力したのは、中国系作家のフランク・チン (Frank Chin) 等である。彼はアジア人の女性的イメージを払拭すべく努力している。ムラの度重なる女性との交渉も、文学のみならず実生活においてアジア系アメリカ人の雄雄しさ、精力の豊かさを示し、白人によってアジア人男性に対して加えられた女性的イメージからの脱却を図ろうとする行為のように思われる。もちろん、だからといって、ムラの行為が容認されるわけではない。妻スージーが個人として被っている不幸は測り知れないからである。たが、アメリカという国において、アジア人と白人との異人種間の恋愛、あるいは結婚は、個人レベルで語ることが許されない。未だ人種間の垣根は高く、恋愛や結婚は常に人種という集団レベルで語られざるをえないのである。ムラにとって、人種の相違を乗り越え、純粋に個人としてスージーと向き合うことは難しい。それは、アメリカという多数の人種が入り混じる国で生きる者の宿命なのかもしれない。

ところで、何故ムラは自分の性の遍歴をあえて語らねばならないのかという問題に戻ろう。それは次のような彼の言葉に示されている。

How, for instance, can I talk to my daughter about sexuality and race? My own experience is so filled with shame and regret, is so filled with incidents I would rather not discuss, it seems much easier to opt for silence. Should I tell her of how, when I look at her mother, I know my desires for her cannot be separated from the way the culture has inculcated me with standards of white beauty? (*Body*, 12)

In the end, what I want to give to my daughter are not my answers, but the courage to ask her own questions and keep asking them, no matter how confusing, frightening, or threatening they may be. I keep reminding myself there is too much to know, too many questions I can't solve. All I can give her are the tools to find her own answers. (*Body*, 12-13)

他民族国家で生きるムラの子供たちも、やがてはデヴィッドと同じ性にまつわる難問を抱え込むことになるであろう。恥辱と後悔に満ちた自分の性の遍歴を語ることは、次の世代とのコミュニケーションを図ることである。強制収容所の経験について一切語らなかった父は、ムラとの間に大きな壁を作り、両者の間には意思の疎通が途絶えてしまった。ムラは、自分の恥辱に満ちた過去を語ることによって子供との間に橋を築こうとしているのである。自分の性の遍歴をかくも詳らかに語るムラの行為は、両親との間にできた壁を決して子供との間にはつくるまいとする意志の表れといってよい。

日系アメリカ文学のなかのデヴィッド・ムラ

これまで見てきたように、デヴィッド・ムラのエッセイ集は日系アメリカ人の著作としては異質のものである。ここでは、ムラの日系アメリカ人あるいはアジア系アメリカ人の文学に対する認識、またそうした文学のなかで彼の作品がどのように位置付けられるのかという問題について検討してみよう。

まずムラは、大学院の学生だったころのことについてこんな風に回想している。

I've learned in graduate school that to call myself a minority writer or a Japanese American writer is to designate myself as second-class, to relegate myself to a literary ghetto, to enter the door only as a beneficiary of some poetic affirmative action. (*Body*, 153)

日系アメリカ人作家は白人社会からある種の恩恵によって書くことを許されてはいるが、所詮二流作家としての地位しか与えられない。こうしたコンプレックスがムラの心を占めていた。しかし、こうした認識はベンヤミン (Walter Benjamin) の歴史に関するエッセイを読むことによって修正を加えられる。

He [Benjamin] talked the way the readers of history identify with the victors, the

tellers of the tale who make themselves the heroes. “That means,” I told Susie, “there are other tales to tell. History is a construct and is created by an interested party, and the interested party is always the powerful and the rich.” (*Body*, 158)

The absence of Japanese Americans or the internment camps in my high school history books wasn’t simply by chance. (*Body*, 158)

歴史は恣意的な構築物にすぎない。日系アメリカ人の歴史あるいは物語がアメリカの高校生の歴史教科書から排除されていることもまた、白人の恣意的な意図の為せる業である。こうした歴史のからくりが分かれば、ムラはもはや臆することなく堂々と日系アメリカ人の人生の物語を書くことができる。

しかし一方、日系アメリカ人の物語が可能だとすれば、日系アメリカ人の物語とはいったいどんな物語なのかという疑問が湧いて来る。

Is it the story of the Japanese Americans a comedy? A triumph? Does the reconciliation of the Nisei with America represent a romance? Or is it a tragedy, followed by a satire, where each identity is tinged with irony, the false fit? (*TN*, 294)

ムラはこう自問した後、次のように決然と言い放っている。

I decided, at least at that moment, it was going to be a comedy. To hell with irony. To hell with history. This was enough. (*TN*, 295)

日系アメリカ人による喜劇。はたして日系アメリカ人の喜劇など今まであったらうか。移民初期の時代から今日まで、とりわけ第二次世界大戦で強制収容所に転住させられるという苦難の時代を味わった日系アメリカ人の物語は、そのほとんどが悲哀に満ちた、余りにも生真面目な物語ではなかったらうか。むろん、日系アメリカ人の書き物のなかに、ユーモアや喜劇的要素がなかったというわけではない。トシオ・モリ (Toshio Mori) やミルトン・ムラヤマ (Milton Murayama) 等の作品にはユーモアが漂っている。しかし、ここでムラという喜劇とは、軽いユーモアを漂わせるような喜劇ではない。作者自身の無様な姿をさらけ出し、時として読者の矚盛を買い、不興を招きかねないようなどす黒い喜劇である。彼はこう語っている。

”Don’t you see, we’re all too nice. That’s what the problem is. We’re all such good solid citizens. Where’s our Genet? Our William Burroughs? Our wasted addicts? Sometimes I think we’re all numb. Nisei, Sansei, Yonsei, you, me, the whole shitload of us.” (*Body*, 251)

日系アメリカ人の文学では、彼らの心中の苦しみや悲しみをそこはかとなく描く作品には事欠かなかったが、そのはらわたを抉り出すような作品には、未だかつてお目にかかることはなかった。ムラの作品は、かつてなかったほどに日系アメリカ人の心の暗部に光を当て、白日のもとに晒している。日系アメリカ人の文学には哀れみや悲しみや情緒だけがあるのではなく、怒りや憤りや汚辱にまみれた行為・行動もあるのだということをムラの作品は示唆しているように思われる。

おわりに

日系アメリカ文学の中心は第二次大戦において強制収容所体験をし、英語で執筆活動のできる二世を中心に展開し、また評価もなされてきた。しかし、二世の作家たちはもはや老境に入り、今後日系アメリカ文学の中心となっていくのは、三世、四世の作家たちである。こうした世代交代にともなって、日系アメリカ文学の質も徐々に変化しつつあるように思われる。悲哀をこめて日系アメリカ人の苦難の歴史を語るだけではなく、憤怒を爆発させるような、あるいは、哄笑を誘発するような日系人の物語もあってしかるべきなのである。モデル・マイノリティというアジア系アメリカ人のイメージを死語とするほどに多様な生き様を描く作品がアジア系アメリカ文学のなかには多数生まれているが、日系アメリカ文学に限っていえば、今一步遅れをとっている感は否めない。そうした現状のなかで、デヴィッド・ムラの作品は異彩を放つものであるといえよう。いわば自伝的な作品である彼のエッセイ集だが、二世の書いた自伝的作品と較べれば、両者の隔たりは歴然としている。ムラの作品は、自伝的作品のみならず、あらゆる文学のジャンルで、新しい日系アメリカ文学が生まれる契機となるに違いない。

注

- 1 David Mura, *Turning Japanese: Memoirs of a Sansei* (New York: Anchor Books, 1991). 引用はすべてこのテキストによる。以下、TN と略記。また、引用末尾の括弧内の数字は頁数を示す。
- 2 David Mura, *Where the Body Meets Memory: An Odyssey of Race, Sexuality, and Identity* (New York: Anchor Books, 1995). 引用はすべてこのテキストによる。以下、Body と略記。また、引用末

尾の括弧内の数字は頁数を示す。

- 3 こうした問題に関する参考文献は枚挙に暇がないが、日本語による参考文献としては、アジア系アメリカ文学研究会編『アジア系アメリカ文学－記憶と想像－』（大阪教育図書，2001年）の第4章「ジェンダー・セクシュアリティ」の項を参照。

Identity and Sexuality of Nikkei Sansei —In the Case of David Mura, Japanese American Poet—

Kiyoto SATO

David Mura, who is a poet and the third generation of Japanese Americans, published several essays including *Turning Japanese* and *Where the Body Meets Memory*. In these books, he refers to some issues in his life: (1) his identity as a Japanese American, (2) the gap between him (sansei) and his father (nisei), (3) Japanese Americans' sexuality in white American society, and (4) the prospect of Japanese American Literature.

(1) Mura was born and raised in Jewish society in Chicago. From childhood through adolescence he averted anything Japanese to assimilate into white American society. Yet he could not help but being aware that he was of Japanese ancestry and then he had suffered from insecurity of identity. It was, however, crucial to secure his identity that he had visited Japan in 1986 as a foreign student. He said, "Japan allowed me to see myself, America, and the world from a perspective that was not white American."

(2) The gap between issei and nisei is well-known, but there is a gap between nisei and sansei, too. The conflict between Mura and his father is characteristic of Japanese Americans. Nisei, most of whom experienced internment camps during World War II, seldom speak about their past. Their emasculated reticence has disappointed and irritated sansei children. Hence the great gap between nisei and sansei.

(3) Mura's sexuality is obsessed with racism. His standard of beauty is white, since he lives in white American society, and he marries a white woman. But he keeps affairs with other women after his marriage, because his seemingly happy marriage with a white woman leads to his acceptance of racism. He must pretend to be not quite satisfied with his marriage to resist racism.

(4) In Japanese American Literature, which is generally given to being modest, decent, pathetic and sorrowful, Mura's writings are exceptional. He blatantly speaks about sexual topics and confesses his own shameful past. He laments that there is no aggressive authors like Genet and Burroughs in Japanese American literature. He might be called the precursor to beget a new tide in Japanese American Literature.